

母親の薬剤服用と授乳に関する研究

(分担研究：新生児・乳児の在宅療法と生活管理をめぐる保健指導に関する研究)

研究協力者 松田 一郎
共同研究者 東 明正

要約：薬剤の種類によっては、母乳中に移行し、乳児に少なからず影響を与える場合があり、母乳栄養が推進されている現在、在宅療法と生活管理をめぐる保健指導の面で適切な対応が必要となる。このような観点から、この研究は授乳中の母親の薬剤服用の実態を調査し、乳児の生活管理面での問題点を明らかにすることにより、適切な指導指針を策定することを目的とし実施された。

見出し語：授乳期母親の薬剤服用、母乳中薬剤移行、乳児の薬剤中毒

研究方法および結果：4つの医療機関を受診した乳児（平均6カ月）を育児中の母親166名を対象にアンケート調査を行った。約70%の母親が産科退院後薬剤服用の経験があり、その過半数が母乳を与えていた。服用薬剤は風邪薬・解熱鎮痛剤・抗アレルギー剤などが大半を占めていたが一部長期投与薬も含まれていた。これら薬剤は22%が産科医、48%が一般医から投薬されていたが、30%は薬局から購入した大衆薬を服用していた。薬剤の服用時、ほとんどの母親が乳児への薬剤の影響について心配し、実際に、乳児への影響を考慮して52%の母親が薬剤の服用を見合わせた経験があった。その際、医師・薬剤師に相談した例は半数以下であり、特に小児科医の関与はほとんどなかった。

考察：この調査により、次のような問題点が明らかとなった。

1. 薬物の母乳中への移行について、新聞・雑誌・テレビなどのマスコミから知識を得ているものの、医師・薬剤師を通じた個別の薬剤についての適切な指導でないため、大多数の母親の不安を解決していない。
2. この問題に関して小児の健康に責任をもつ小児科医の関与が少なく、母乳を介しての乳児への影響について新たな情報が得られにくく、情報の feed back が出来ない。

このような問題点を踏まえ、今後母親への医学的知見に基づいた指導を強化すると同時に、種々の薬物についての医学的知見の集積と整理を行う必要を痛感した。

必要と思われる母親への指導・医師の対応を要約してみた。

母親への指導：1.乳児への薬剤曝露を最小限にする方法を指導する。→母親の服薬は授乳の

直後か乳児の睡眠期間の直前に行う。2.薬剤を服用する場合、乳児への影響に留意するよう指導し、小児科医への相談・受診を勧める。特に母親が長期に薬剤を服用する場合、小児科医による医学的評価が必要である旨、指導する。3.育児中の喫煙(Nicotine)は母乳を介しての薬理学的影響がない程度でも、育児環境を考慮すれば禁煙を指導する。

医師の対応: 1.授乳中の母親に対して行おうとしている薬物療法は真に必要なかの検討を行う。→小児科医との協議は有用である。2.母親の治療には最も安全とされている薬剤を使用(例:アスピリン→アセトアミノフェン)。3.乳児に対して影響の可能性がある薬剤(例:フェニトイン、フェノバルビタール)を服用している場

合、出来るだけ乳児の血中濃度を測定し、乳児への影響について詳細な検討を行う。4.現時点の知見では、授乳の障害となる薬剤は限られており、安易に母乳栄養を中止させるべきでなく、医学的知見に基づいた判断を行う必要がある。5.母乳を介しての薬物の乳児への影響についての情報は限られており、小児科医は種々の薬物について医学的知見を集積するために努力する必要がある。

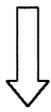
文献:

1. American Academy of Pediatrics, Committee on Drugs, The transfer of drugs and other chemicals into human breast milk. Pediatrics 84:924,1989



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:薬剤の種類によっては、母乳中に移行し、乳児に少なからず影響を与える場合があります、母乳栄養が推進されている現在、在宅療法と生活管理をめぐる保健指導の面で適切な対応が必要となる。このような観点から、この研究は授乳中の母親の薬剤服用の実態を調査し、乳児の生活管理面での問題点を明らかにすることにより、適切な指導指針を策定することを目的とし実施された。